令和六年度　道伝えの日　お月見歌会　入選歌

課題歌「月」

［雁部貞夫先生選］

三一、滑落し動かぬ邦人登山家を夜毎照らすかカラコルムの月　　鶴見　輝子

カラコルムの高峰で遭難した日本人登山家を折からの月の光が清らかに照らし出す。山の事故を清らかに描けたのも「題詠」の働きがある。

三六、Ｋ２に永遠にとどまる登山家に冴え冴え響く月のララバイ　　中島　芳子

三十一番と同じ素材を詠み、遭難者を月光が母の子守歌を歌って慰めているようだと美しく詠む。やはり「題詠」が想像力をかきたてる力を持つ。

互選［一　席］

一三、鍵盤を皺深き指の滑りゆくフジコヘミングの「月光」は冴ゆ　　青木　真知子

互選［二　席］

二七、不登校の児らと作りしお月見の団子にねがう一夜（ひとよ）の和み　　谷口　茂雄

三一、滑落し動かぬ邦人登山家を夜毎照らすかカラコルムの月　　鶴見　輝子

自由歌

［雁部貞夫先生選］

四、未来へも過去へも行ける恋もする三十一文字の旅果てしなし　　三尾　幸子

歌の効用を自在に詠んでいる。作者の表現力の豊かさが実によく発揮されている。

二六、天を衝くヒノキの美林気は澄みて天保時代のざわめき届く　　田中　彰

実景に基づく歴史詠。ヒノキの美林を詠むことで、郷土の歴史を伝え得る。すばらしいことだ。

互選［一　席］

二一、腕いっぱい広げしタオルに風呂あがりの四・七キロしかと受け止む　　横山　美保子

互選［二　席］

二三、形見なる衣に残るしつけ糸ほどよき緩さの母の子育て　　熊崎　佐千子

互選［三　席］

二、近況を語れる吾に旧友は句読点打つやうにうなづく　　倉坪　芳江

令和６年「お月見短歌会」高校生の部　選評

選　桐山吾朗

入選　第一席　飛騨神岡高等学校　三年　井上歩香

まだ恋を知らぬ一口　照らすよう春色の月ティカップに揺れ

【評】　対象は友人だろうか、紅茶を飲みなれない稚(いと)けなさに、ぎこちないが初々しい純真さを覚えて、ティカップの液面に映っている月と重ねて作者の思いを表現しています。「春色の月」は、青春の入り口に差し掛かっている少女につなげたイメージと思われますが、かえって安易な概念に流れて、描写の力を削いでいます。しかし、全体として小さな茶器の一現象をとらえた鋭気はすばらしく、「月」のとらえ方が個性的であることから入選第一席としました。

入選　第二席　吉城高等学校　一年　清水雷馬

毎月窓に昇りくる十五夜をベッドから追う僕のかぐや姫

【評】　「かぐや姫」は、作者にとって憧れの恋人でしょうか。永遠に月の住む佳人に、将来必ずや出会うであろう素敵な恋人を想い描いて詠っています。恋に恋する十代の青年の清純な感性が素直に表現されていて、「ヤング」らしさを買いました。ただ、「十五夜」は、陰暦十五日目の夜のことであって「月」そのものを指してはいないし、「ベッドから追う」も、視線の描写としてはやや雑な表現で、全体として未完成の印象は免れません。今後の作歌に備えてください。

入選　第三席　吉城高等学校　一年　上谷紗希

「月にまで笑われてるな」と自嘲する　行く先なんて分からぬ宵闇

【評】　何らかの理由から、作者は自己嫌悪におちいっていて、宵闇に見え隠れする月までもが自分を嘲笑っているように感じています。気分の高揚と消沈の振幅が大きいのは、自意識が先行しがちな青年期にはよくあることで、作者の心境もまさにその感覚でしょう。将来の人生に関わる不安を宵闇に喩えて、いささか自信を失いかけている自分の内部を思い切って露呈したところに、青春のエネルギーのほとばしりがあります。明るい月光に照らされて、行先への道筋がはっきりと見えてくることを祈ります。

【総評】

今年の応募歌は、「月齢」を詠んだ歌が目立ちました。十三夜・十五夜・十六夜…と、月の満ち欠けのはざまに自己の思いを詠いこもうとする応募歌を見ますと、古典の学習が背後にうかがわれ、例年多い「かぐや姫」に次ぐ「お月見短歌」の用語として定着した感がありました。

全体に、応募間近になって作歌に取組み始めたと思われる即席感は昨年と同様に見受けられ、高校生短歌に多い傾向の「体言（名詞）の羅列による構成」「熟成しない自己流の表現」などの見直しを含めて、さらに詠歌の深化を目指してください。期待しています。